

発行：学園都市大学古文書研究会
発行責任者：代表 中村和男



公開講座

「古文書学」への招待

「古文書学」いま・むかし

元日本古文書学会会長・立正大学名誉教授

中尾 堯氏

六月七日（土）講師に元日本古文書学会会長・立正大学名誉教授の中尾 堯氏を迎えて「古文書学」への招待 く古文書の「いま・むかし」と題する無料公開講座（主催：学園都市大学いちよう塾）が東急スクエア十二階イベントホールにて開かれた。

はじめに、古文書は観るものだという基本理念から戦国期の古文書、源頼朝下文と豊臣秀吉書状の読文、釈文の解説がありました。その中で、博物館などで古文書を読もうとするときはノートを持つていき、まず読める字を書き写し分らないところは四角を書いて残しておき後からじつと見ていく、ちょうど古文書と対話するような姿勢で臨むことが大事であるということをお話されました。

続いて本題に入り、書状を読み解く上で基本となる ①書を確認するための印章と花押 ②紙遣いの方法 ③文書の四要素について、現在でも引き継がれている風習の持つ意味などの例を交えて分かりやすく説明された。

①では、中世の古文書では書の確認は主に印鑑である。天皇印が一番大きく印文は「天皇御璽」。印鑑は主に朱印であるが、戦国時代以降黒印も用いられた。朱印でも色が濃いのがランクが高く、黒印は朱印の下のランクで庶民が用いていた。織田信長の印文は「天下布武」であることはよく知ら

れているが、書状に朱印を押しているか黒印を押しているかで信長が宛先人をどのように見ていたかを知ることが出来る。また、花押には自署の代わりに書く記号で、自分の名前を行書で何回も書いて図様化した草名体（平安時代の貴族がよく用いた）の他、源頼朝の二合体、豊臣秀吉の一字体、水戸光圀の別用体、徳川家康の明朝体などの詳細な解説がなされた。

さらに、例示された日蓮上人の私文書のような場合、書いた月日しか記述されていないのでその年代を知る手掛かりとして、花押の変遷から年代を類推していく話などは大変興味をそそられた。

②では、料紙の種類として、ごく一般的にはクワ科の繊維を材料とした楮紙や油紙のような強靱な雁皮紙が用いられていたが、写経には竹や麻の繊維を漉いた竹紙、麻紙が使われていた。また、料紙の使用法では、堅紙、折紙、切り紙、

続紙、重ね紙があるが、横長に置く堅紙がランクが上で、縦に下から折って使用する折紙は念の為にとういうような場合に使われていたなど奥深い内容であった。

③では、前出の日蓮書状を釈文されるなかで文書の四要素である本文（書き出し、用件書、書止）、日付、差出書、充書等の解説がありました。

締めくくりに、「古文書は熟覽すると何かを語りかけてくる」という言葉で、古文書学を志す参加者にエールをおくられた。



「證文手形案文」の学習について

2013年度2月、3月の全体学習として、既に取り組んでいる課題ですが、2014年度の10月、11月、12月も引き続き「同證文」を学習することになりました。

10月17日（金）は、まず前半はグループごとに学習し、後半に、東西南北各グループから選出された担当者により、ページごとの解説がなされ、その後質疑応答がありました。

10月の学習内容は、まず、原本の中の暦の略解の項から、（十干及び十二支について）、次に（書状端作へしよじょうはしづくり）、いわゆる一筆啓上奉候を極上の言い回しとし、一筆啓上申候は下の下とのこと。次の（同略書少し古びて書時八）は、以雁書（がしよをもつて）から魚函まで、実に52の熟語が書かれています。現代ではお目にかかれぬものばかりです。続いて、（益弥之上下へますますいよのじょうげ）、（安否を訪の上下）、（返事の端書）、（上所の事）これは手紙の宛名の上に書き添える熟語のこと、最後の（寺などへ書ときは）まで、見慣れぬ文字に苦しみながら、なんとか予定時間内に学習を終えました。

予定	一月	・定例会なし
年度	二月	・「信長公記」・全体学習会
2015	三月九、十一	・作品展出版
今年	三月	・「信長公記」・全体学習会